

Title	激石のスタイルシフト
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1998, 32, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56453
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

漱石のスタイルシフト

渋谷 勝己

キーワード：夏目漱石・可能表現・スタイル切り替え・社会言語能力

1. はじめに

本稿は、夏目漱石の小説・講演（漱石のことばでは演説）・講義、日記や学術研究書のなかのことばに見られる可能形式を言語変項にとり、個人のスタイル切り替え能力を記述することを目的とする¹⁾。ただし漱石の時代には、可能表現は変化の過程にあり、ゆれている。また漱石自身も、小説において、たとえば初期の否定辞ヌ系を多用する文章から、後期のナイ専用の文章へと、時を経るにしたがって用いることばを変えてもいる（渋谷1988）。したがってその切り替えは、一方では共時的なものでありながら、また他方では、日本語全体および漱石個人両者のなかでの時間的なシフトとして捉えるべき部分もあるということに注意する必要がある。

なお、ここで漱石の可能形式を取り上げるのは、次の三点でスタイル切り替えの実態が捉えやすいという理由による。

- (i) 明治・大正期は、現在よりも可能形式が多様であること
- (ii) 漱石は、小説・日記・講演・学術研究など、多様なジャンルの作品群を残していること
- (iii) 東京語の可能形式相互の間には、全国各地の方言に見出される能力可能と状況可能のような意味の対立はなかったこと²⁾

2. 調査の方法

2.1. 分析対象形式

漱石作品の本文は、新書版漱石全集（岩波書店）に拠った。引用にあたって、表記を若干変えたところがある。漱石の作品群には諸本によって異同があり（青柳1981、山下1993など参照）、可能形式に関してもたとえば『坊つちやん』では、次のような異同がある（a-cは青柳1981による）。

- (1) a まづくつて、とても食へないんださうだ（自筆原稿）
- b 食へない（ホトトギス初出本文49ペ）
- c 食べられない（『鶉籠』初版本文）
- d 食へない（新書版245ペ上）

しかしその数は全体数に比してわずかであるので、大まかな傾向を探るには十分耐え得るものと判断する。小説については、ほぼ一年に一冊の割合で選んだ。講演、日記、学術書については、あるものを使用した³⁾。

本稿で取り上げる可能形式は、以下のものである。漱石の時代に一般的に見られる特徴をあわせて記す。

まず、現代語にも見出される形式には、次のものがある。

- (a) 可能動詞（五段動詞：書ケル・読メルなど）
- (b) 助動詞系形式（以下「助動詞」）
 - (b-1) レル（五段動詞：書カレル・読マレルなど）
 - (b-2) ラレル（一段・カ変動詞：見ラレル・来ラレルなど）
- (c) デキル系形式
 - (c-1) スルコトガデキル⁴⁾（すべての動詞）
 - (c-2)（名詞ガ）デキル⁴⁾（サ変動詞：勉強ガデキルなど）
 - (c-3) 動名詞デキル（サ変動詞：勉強デキルなど）

このうち(a)可能動詞と(b-1)助動詞レルは漱石の時代にはまだ競合して

おり、ようやく可能動詞に一本化されつつある段階にあった。ラ抜きことばはまだ使われていない。また、(c-2)の一部（名詞ガの部分動名詞ガのもの）と(c-3)動名詞デキルも競合しており、現在とは違って、区別/研究/満足ガデキルなどガを介することのほうが多いといった状況である。

一方、現在ではその使用が稀な形式に、次のものがある。

(d) エル/ウル系統

(d-1) スル (コト) ラエル/ウ (ル) (すべての動詞)

(d-2) 連用形+エル/ウ (ル) (すべての動詞、以下「連用エル」)

(e) アタフ系統（漱石の例はすべて否定形で現れる）

(e-1) スル (コト) アタフ (すべての動詞)

(e-2) 連用形+アタフ (すべての動詞、以下「連用アタフ」)

(d-2)の連用エルを除き、いずれも漢文訓読系統の形式である⁵⁾。

ちなみに(c-1)(d-1)(e-1)はいずれも、動詞部と可能部を独立語（スル+デキル/エル/アタフ）によって分析的に表す形式であり、その点、他の形式と同列に置くことはできない。しかし意味的にはほかの形式と同義であり、またスタイル切り替えを見るための大事な指標になることから、ここでは対象とした。

なお、本稿では生産的な可能形式の使用実態を調査することに重点をおいたために、デキルダケ、ヤムラエナイ等の固定化した形式や、当為/禁止表現等の後部要素および単独で評価を表すイケルは除外した。また、『文學論』に見られるベシ、ベカラズ、ヨクスといった可能形式も、小説類ではほとんど使用されていないことから、スタイル切り替えの実態は(a)~(e)の形式で代表させることとし、一切除外した⁶⁾。逆に、(d-1)の命題部と可能部の両者が否定された形であるセザルラエナイ等は当為を表すものではあるが、(d-1)との形式的な対応を認め、参考までに取り上げる。

以上の方針にしたがって、漱石作品のなかの用例分布をまとめると、表

表1 小説会話文

形式	ア タ フ			エ ル			デ キ ル			可能動詞		レ ル		ラ レ ル		
	Vコト	連体	連用	Vコト	連体	連用	Vコト	Nガ	VN	他	思考動詞	他	思考動詞	他	思考動詞	他
猫 (1905-6)	-	-	-	-	3/-	2	27	35	3	17	1	97	9	-/18	1	3/30
坊ちゃん (1906)	-	-	-	-	-	1	-	11	1	1	-	6	1	-/3	1	1/1
虞美人草 (1907)	-	-	-	-	-	-	-	10	24	1	6	1	52	1	-/7	-
三四郎 (1908)	-	-	-	-	-	6	2	9	2	1	-	41	3	-/1	-	2/10
それから (1909)	-	-	-	-	1/-	1	9	13	4	4	-	19	-	-/3	-	1/9
門 (1910)	-	-	-	-	-	-	-	6	2	7	-	17	-	-/2	-	1/9
行人 (1912-3)	-	-	-	-	-	3	18	15	-	2	-	37	2	-/4	-	1/25
心 (1914)	-	-	-	-	-	1	6	10	4	2	-	17	3	-/7	-	-/18
道草 (1915)	-	-	-	-	-	-	-	10	11	2	6	3	25	1	-/1	-
明暗 (1916)	-	-	-	-	-	3	17	21	5	9	2	79	1	-/6	-	1/28

(連体エルの左の数字はセザルエナイの用例数、助動詞レル・ラレルの左の数字は自発・受身にも解釈できる用例の数。右はいずれも可能の用例数。手紙の会話文を含む)

表2 小説地の文・手紙文他

形式	ア タ フ			エ ル			デ キ ル			可能動詞		レ ル		ラ レ ル		
	Vコト	連体	連用	Vコト	連体	連用	Vコト	Nガ	VN	他	思考動詞	他	思考動詞	他	思考動詞	他
猫 (1905-6)	-	1	2	-	13/-	29	47	57	11	13	3	61	38	-/24	6	6/24
(手紙)	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-/1	-	-
坊ちゃん (1906)	-	-	-	-	1/-	-	8	27	1	12	3	50	2	-/4	2	-/17
(手紙)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-/1
虞美人草 (1907)	-	1	-	-	-/2	9	21	32	1	8	7	40	17	1/12	1	3/15
三四郎 (1908)	-	-	-	-	1/-	19	17	19	1	1	8	50	33	1/4	1	-/19
それから (1909)	-	-	-	-	5/-	53	38	16	2	6	6	59	22	-/9	5	3/32
門 (1910)	-	-	-	-	1/-	26	28	20	3	2	4	44	30	4/5	3	6/15
行人 (1912-3)	-	-	-	2	4/-	33	26	15	2	2	11	44	25	11/7	9	4/22
(手紙)	-	-	-	-	1/-	5	10	8	7	3	1	19	4	-/6	-	2/23
心 (1914)	-	-	-	-	-	6	21	6	2	2	6	21	10	2/1	4	5/17
(手紙)	-	-	-	-	-	14	48	9	5	-	5	54	28	1/7	4	2/27
道草 (1915)	-	-	-	-	-	28	53	11	6	2	19	47	18	6/3	1	3/27
明暗 (1916)	-	-	-	-	17/-	35	131	25	11	6	16	108	28	28/11	8	12/53
(手紙)	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-/1
講演1 (1907-8)	-	-	-	-	-/1	70	94	49	11	12	1	45	34	10/24	5	11/40
講演2 (1911)	-	1	1	-	-	28	24	28	11	8	-	35	13	3/6	-	4/15
日記 (1909-11)	1	5	-	1	1/-	10	19	8	-	5	1	31	2	2/4	1	-/24
文學評論 (1909)	-	-/6	1	4	5/-	110	107	79	17	21	5	106	83	15/25	6	16/47
文學論 (1907)	37	1/133	46	23	34/84	388	1	1	-	1	-	1	4	-/1	1	13/3

(連体アタフ/エルの左の数字はセザルアタフ/セザルエナイの用例数、助動詞レル・ラレルの左の数字は自発・受身にも解釈できる用例の数。右はいずれも可能の用例数。心中思惟を含む)

1 (小説会話文)、表2 (小説地の文・手紙文他) のようになる。Vは動詞、Nは名詞、VNは動名詞のこと。またアタフ等の欄にあるVコト・連体は、それぞれ、スルコトアタフ・スルアタフ等の形式のことである。V Nデキルは抱合形式、NガデキルのNには、動名詞を含め、さまざまな名詞がたつ。可能動詞と助動詞については、思考動詞⁷⁾ とその他にわけた。

二つの数字の記載がある欄については、§ 2. 2. および表下の注を参照。

次に、用例採集の方法について二点、補足する。

2. 2. 受け身・自発と可能

助動詞の場合には、隣接する意味、特に受け身や自発との対立をめぐって、用例採集に際し若干のあいまいさが生じることがある。たとえば行為の対象となる物や事が主題になったときには、受け身として解釈されやすくなるといった問題である（森田1989：1213-4；以下例文末の略記は、作品名（2冊にわたる場合には上下巻）、ページ、上段下段の別を示す。作品名の略表記は、表2の作品名を参照）。

(2) それで私の目的は遂に達せられなかった（こ8下）

(3) 或程度の手腕は無論認められた（明上237下）

一方、感覚・判断等を表す動詞については、自発（ときに受け身）との境界が不分明になる。

(4) 迷亭も少々恐縮の體に見受けられる（猫上85上）

(5) 金網で鶏を圍ひ飼ひにしたりするのが閑静に眺められた（こ65上）

(6) 津田の心には、變な對照が描き出された（明下142下）

次の(7)では思ハレルと想像サレルが併置されることによって後者も自発を表したように見えるが、(8)では解釈サレルが取レルという可能動詞と併置されており、自発か可能かの判断をあいまいにしている。

(7) この女はどんな陳腐なものを見ても珍らしそうな眼付をする様に思はれる。其代り、如何な珍らしいものに出逢つても、やはり待ち受けてゐた様な眼付で迎へるかと想像される（三129上）

(8) [其態度が]早く嫁に行く先を極めて、斯んなものでも縫ふ覺悟でもしろといふ謎にも取れた。何時迄小姑の地位を利用して人を苛虐めるんだといふ風刺とも解釈された（行175上）

また同じ助動詞文でも、否定文のほうが可能として解釈されやすいという問題もある。

(9) a 其様子が恰も御米を路を悪くした責任者と見做してゐる風に受
取られるので (門148下)

b 単に遠慮のみとは到底受け取られない (猫下152下)

以上、受け身あるいは自発としても解釈できる例については、思考動詞を別にして、その用例数を助動詞欄の左側に示した。右の数字は可能の用例数である。なお、自動詞 (売レル・切レルなど) についても可能動詞と紛れることがあるが、あいまいな例はすべて削除した。

2.3. 出来と可能

同様にして (Nガ) デキルについても、出来か可能かで判断がむずかしい場合がある。この場合、基本的には、(a)ガ格にたつ名詞句が動作的な内容をもつか否かといった特徴や、(b)助詞ガおよびデキルをヲとスルに置き換えることによって基本文が作れるかどうか、(c)デキアガルに置き換えられるか否かといったテストによって確認することはできる。

(10) 太郎と競争ガ デキル (可能)

(b) 太郎と競争ヲ スル

(c) *太郎と競争ガ デキアガル

しかし次のような文は、スルに置き換えがきく一方で、動作の結果の出来を表すことから、可能、出来どちらにも解釈できる例である。

(11) 用意は出来ているのかい (道176下)

(12) 支度ができましたからどうぞ (明上97)

また、特に意図的な作成 (作レル等と意味的に類似する場合、(13) (14)) や、能力の意味を表す場合 ((15) (16)) には、スルに置換できなくとも可能の意味が出てくることがある。

- (13) 灰吹き杯は裏の簀へ行つて切つて来れば誰にでも出来るから、
賣る必要はない（猫下174下）
- (14) 君旅費はもう出来たのか（明下38下）
- (15) 歌なんぞ出来るもんですか（行69下）
- (16) 興津の高さんは、あんなに學問 [cf.英語] が出来て（三148下）

このようにしてあいまいな部分が残ることは免れないが、本稿では、文法的に生産性のある可能形式だけを問題にするという方針から、(Nガ)デキルを(Nヲ)スルに置き換えて基本文が作れるか否かということだけを基準に判断した。このテストによれば、(11)(12)は可能のデキル、(13)～(16)はそうでないということになる。

3. 分析：漱石のスタイルシフト

3.1. 動詞と可能形式との共起制限

上で、本稿では生産的な可能形式だけを考察の対象に据えるということ述べた。しかしそれぞれの可能形式は、どのような動詞とも自由に結び付くというわけではない。そこでまず、可能形式と動詞との結び付きに関する制約条件と実態をまとめておこう。

まず、日本語一般に、次のような共起制限がある。

- (a) 動詞が受け身形の場合には、可能の助動詞は後接しない。スルコトガデキルや連用エルなどが使われる。

(17) 漸やく悲しい氣分に誘はれる事が出来たのです（こ221上）

一方漱石個人の用例には、次のような片寄りが見出される。

- (b) 圧倒的に可能動詞のかたちをとる動詞がある。取ル（68/76=89.5%）・受取ル（37/41=90.2%）など。両者とも「解釈する」の意に限定すれば、その率はずっと高くなる。
- (c) 逆に寝付ク、争ウといった動詞では、助動詞レルのみが用いられて、

他の形式は使われていない。申スについても、スルコトガデキルが1例ある以外は16例が助動詞レル形である。

スタイルシフトということを論じるためには、本来ならば、切り替えにあずからないこれらの用例を省くことが必要である。しかし本稿は、漱石における可能形式使用のありかたを、総体として鳥瞰することを目的としているので、これらの例も含めて分析することにする。

なお、比較的多くの用例が拾える(テ)行クと言フ/云フについてその可能形式の分布を見てみると、以下の数字が得られる。

	(テ) 行ク	言フ/云フ
可能動詞	49 (59.0%)	148 (68.5%)
助動詞レル	31 (37.3%)	38 (17.6%)
スルコトガデキル	3 (3.6%)	13 (6.0%)
連用エル	0 (0.0%)	17 (7.9%)

行クについては現在でも、評価のイケルと衝突することから助動詞レルが多用されており(渋谷1993:144-6)、その条件が漱石にも及んでいることが推測できる。しかし他の動詞については、スタイル以外、可能形式の選択にかかわる言語内外の条件を十分に把握するまでには至っていない。

3.2. 漱石のスタイルの時間的推移

さてここで、十二年間にわたって書かれた小説類によって、漱石自身のスタイルの時間的な変化をたどってみよう。

漱石の小説類のなかから、動作の内容が明示された形式である、連用エル；スルコトガデキル；Nガデキル・VNデキル(ひとつにまとめる)；可能動詞；助動詞レル(思考動詞の例と両義的な例を除く)；助動詞ラレル(同)の6種の形式を取り出して、それぞれの使用率をまとめると、図1(会話文)・図2(地の文+手紙文)のようになる⁸⁾。

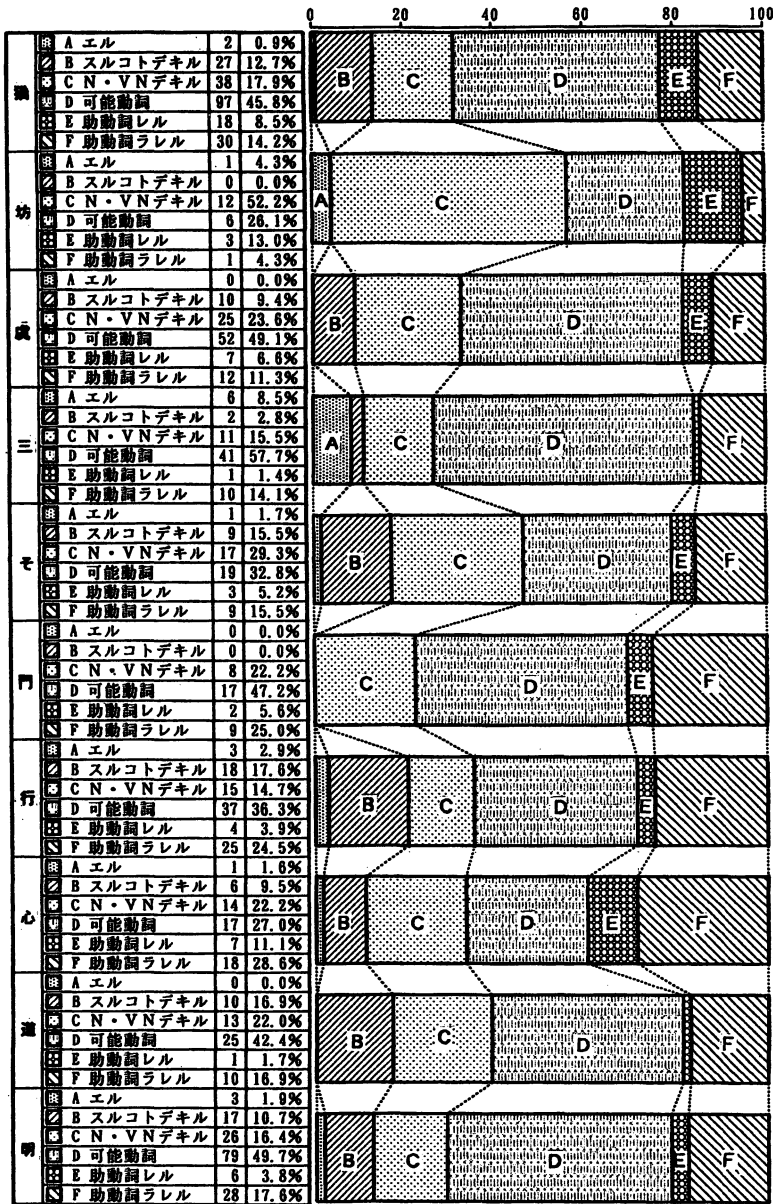


図1 小説会話文

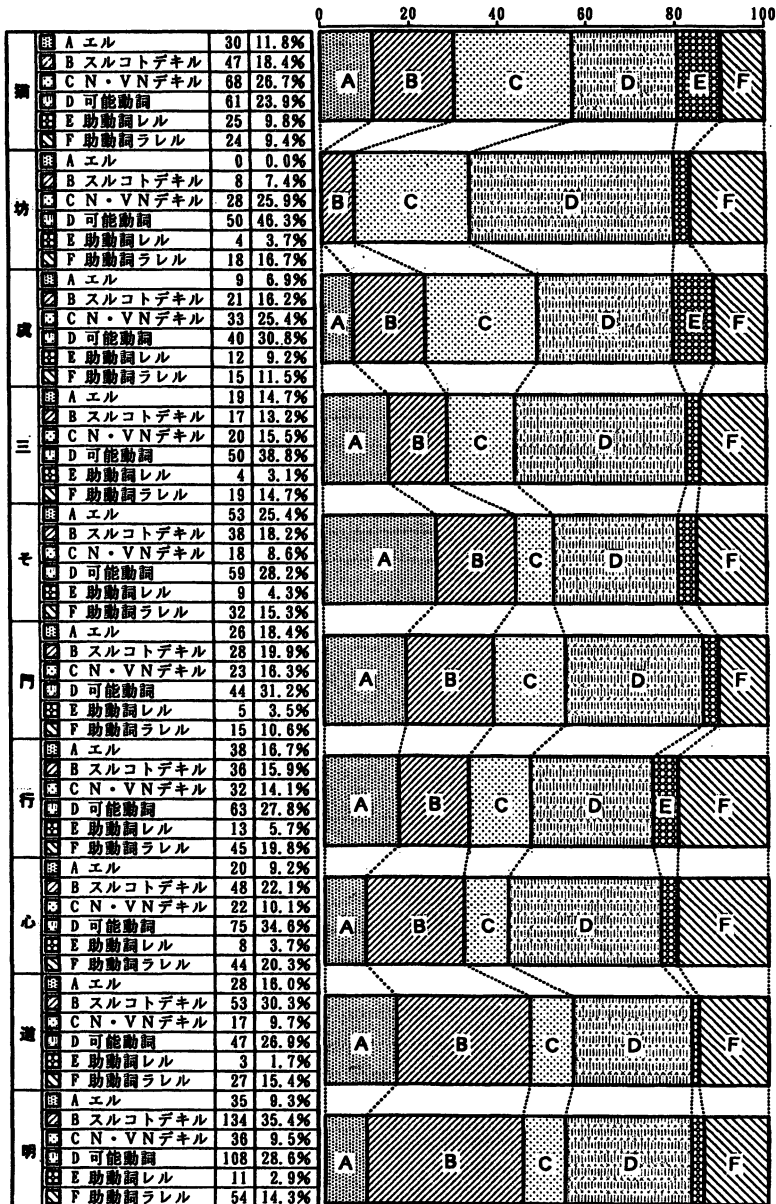


図2 小説地の文+手紙文

この図、および表1・表2から、次のようなことがわかる。

(a) 用例数が少ないことに注意しなければならないが、会話文では、経年的な推移は特に観察されない。

(b) 一方地の文では、以下の二点が注目される。

(b-1) 『門』あたりを境にして、五段動詞について、自発にも解釈できるレルが増加する(表2)。

(b-2) 『心』あたりから、スルコトガデキルが増加する。

(b)については、内容とも連動しつつ、漱石自身の小説のスタイルが確立したことを想定すべきであろう。

なお、個別的には、『坊つちやん』の特異性が目立つ。特に、会話文でNガデキル、地の文で可能動詞が多用され、地の文で連用エルが使われていない等のことが指摘できる。もっともNガデキルと可能動詞については、可能形をとる動詞の活用タイプの問題でもあるので、スタイルとは切り離して考えるべきかもしれない。

3.3. 漱石のスタイルの共時的切り替え

次に、漱石は作品のジャンルによってどのように形式を使い分けたか、その実態を探ってみることにしよう。ここでは、小説以外に、講演や講義、学研究など、さまざまなジャンルにまたがって作品が公にされている、1907年から1911年ごろまでの実態を考察することにする。小説群からは、『三四郎』『それから』『門』の三部作を取り上げる。

これらの作品によって可能形式の用例分布をまとめると、図3のようになる。ここでは、(セザルアタハズ/ラエズを除く)アタフ系全部と連用エル以外のエル系形式をまとめて訓読系と表示した⁵⁾。この図から、二つのスタイルと、三つの切り替えのありかたが抽出できる。

(a) まず『文學論』以外の作品では、同じ形式の相対的な使用頻度が異

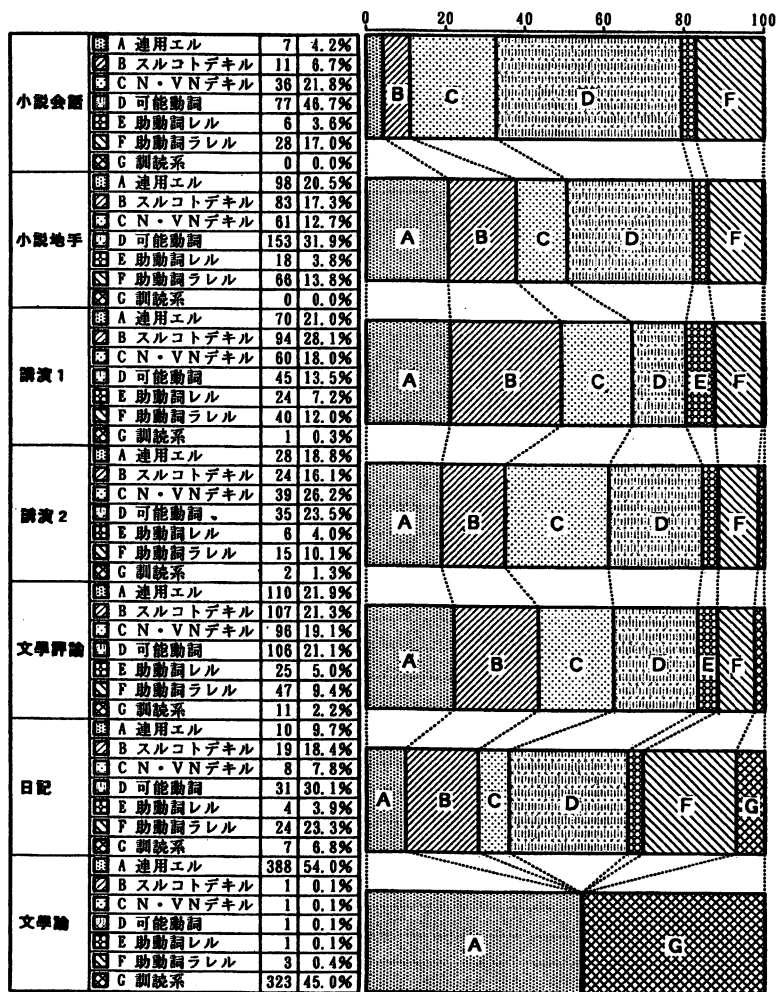


図3 ジャンル別使用度数

なるだけの、いわば「連続的な切り替え」が行われている。小説の実態から判断すれば、地の文に多い、全動詞対応型の連用エルやスルコトガデキルが多用されるほどフォーマルな極に片寄り、また会話文に多いNガデキル・VNデキル・可能動詞・助動詞といった形式が多用されるほど、イン

フォーマルの極に近づくということがいえる。

ここで、同じ講演でありながら講演1と講演2で連用エルとスルコトガデキルの用いられかたが異なり、講演1にそれが多いのは、聴衆（したがって内容）の違いを反映しているからかもしれない。講演2はすべて、朝日新聞社の主催によって一般向けに実施されたものであり、また講演1としてまとめたうちの一つ（『文藝の哲學的基礎』）は東京美術學校文學會開會式において学生を対象になされたものである。漱石の講義ノートである『文學評論』は、講演1と講演2の間に位置づけられよう。

(b)次に『文學論』については、訓読系の形式が多用される一方、デキル系形式、可能動詞、助動詞などがほとんど使われていないことから、ほかの作品と連続するスタイルではなく、連用エルを共有しつつも、質的に異なるスタイルが使われていると見てよい⁹⁾。ここではこの切り替えのありかたを、「不連続な切り替え」と呼んでおこう。

(c)このようにして二種類のスタイルを設定したとき、日記などは、二種のスタイルを「混合」して著したジャンルだと認めることができる¹⁰⁾。

以上漱石のスタイル切り替えのありかたをまとめると次のようになる。

- (i) 漱石は、スルコトガデキル、Nガ・VNデキル、可能動詞、助動詞からなるスタイル（スタイルA）と、訓読系形式が構成するスタイル（スタイルB）の、二つのスタイルをもっている。
- (ii) スタイルAについては、各形式（特にスルコトガデキル）の頻度を変えることによって、下位スタイルを作り出している。
- (iii) 連用エルはスタイルA・Bいずれの構成要素にもなっているが、ゼロを含めその頻度によってスタイル調整にあずかっている。
- (iv) ジャンルによってはスタイルA・Bを交ぜることがある。

4. 展望

ところで、本稿で得られたスタイル切り替えのモデルは、漱石一人のケーススタディに基づくものであり、その結果をどの程度一般化できるかという問題を必然的に抱えてこんでいる。また同時に、可能形式についていえたことが、他の言語変項についてもいえるかどうか不明である。

しかし他方では、本稿で採った分析の視点は、日本語のスタイル切り替えをめぐるさまざまな問題の探究に適用できるものでもある。たとえば、共通語と方言の切り替えの問題がある。この問題についてはこれまでは、選択肢による意識調査がほとんどで(『月刊言語別冊 変容する日本の方言』1995.11など参照)、自然談話を用いた実証的な研究はほとんどなされてこなかったが、共通語と方言についても、不連続な切り替えを行うところ/人と、連続的な切り替えを行うところ/人があるように思われる。この種の言語行動のメカニズムも、本稿に示したような方法を採用することによって、今後、統一的に解明されていくことが期待される。

注

- 1) 渋谷 (1993: §6) の分析を一部補完、一部修正するものでもある。
- 2) 漱石が用いる可能形式の間に意味の違いがないことについては、次のようなセットが多く拾えることからわかる。
 - a 自分が養成する君子が潜られん爲に、わざわざ職人を入れて [四つ目垣を] 結び繞させたのである (猫下45下)
 - b 成程いくら風通しがよく出来て居ても、人間には潜れさうにない (同)
 - c 四つ目垣の穴を潜り得る事は、如何なる小僧と雖到底出来る氣遣はないから (猫下46上、ただし得るは余剩的)
- 3) 以下、講演は、文藝の哲學的基礎・創作家の態度 (以上講演1)、道楽と職業・現代日本の開化・中味と形式・文藝と道徳 (以上講演2) ; 日記は、1909.3.2-8.28、9.1-10.17、1910.6.6-7.31、1910.8.6-1911.1.21を使用した。用例採集にあたっては、引用部や『文學評論』の翻訳の部など、漱石自身のこ

とばでないと思われる箇所は除外した。

- 4) 助詞ガの部分は、ハをはじめ、さまざまに変わりうる。
- 5) 斎藤 (1998) によれば、連用アタフの成立は近代のことである。
- 6) その他、デキ(ウ)ル(コト/モノ)ナラ(バ)・デキ(ウ)ルカギリ・デキウベクンバヤ、(始末に) 負ヘナイ、ヤリ切レナイなども、固定化形式として除外した。また、ナル系形式は生産性がないために、話セル・持メル・讀メルなどのうち評価用法で使われたものはスルコトガデキルで言い換えられないために (渋谷1993: 21-2)、アタフ・エルの単独使用は数が少ないために、それぞれ除外した。逆に感じ得ラレナイ (そ 138上) のような二重可能形式は、エル・ラレルそれぞれの例とした。
- 7) 思考動詞としたものは次の通り。怪ム・疑フ・驚ク・思ヒ合ス・思ヒ出ス・思ヒヤル・思フ・惚ブ; 案ズル・感ズル・察スル・存ズル。
- 8) デキルのうち「他」を除外したのは、これが、テキストのなかで、次のように代動詞的に使われている例があるためである。
 - 雙方共に相手を説き伏せてやらう杯と云ふ考は丸でなかつた。又やつたつて出来るものではない (評189下)
- 9) 採集の対象には含めなかったが、『文學評論』と『文學論』に、連用エルが動詞以外に後接したものがある。
 - 文學的内容たり得べき一切のもの (文79上)
 これは、小説等の連用エルと学術研究書の連用エルの質的な相違を示す例かもしれない。今後、個々の用例の吟味が必要などころである。
- 10) 漱石が二種類のスタイルを区別していたことは、『文學論』の本文で唯一デキルを用いた箇所が、わかりやすく言い換えた部分であることから推測できる (他は序文に1例)。
 - 彼等にあつて尤も大切なるは説明材料よりも被説明材料よりも兩者の一路に合してびたりと動かざる點にあり [中略]。換言すればうまく説明が出来たか出来ぬかにあり (文228上)

参考文献

- 青柳達雄 (1981) 「解説」『坊っちゃん』『ホトトギス』初出本文』 勉誠社文庫
 斎藤文俊 (1998) 「近世・近代の漢文訓読」『日本語学』17-7
 渋谷勝己 (1988) 「江戸語・東京語の当為表現」『日本学報』7
 ——— (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1
 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

山下浩 (1993) 『本文の生態学-漱石・鷗外・芥川-』 日本エディタースクール
出版部

(文学部助教授)